

## イナカ(田舎)の門名とウラ(浦)の屋号

一下関市安岡地区のばあい

岡 野 信 子

### はじめに

門名(カ下ナ)、あるいは屋号(ヤゴ一)と呼ばれているのは、近隣社会における、家  
家の伝統的通称である。これが社会事情や社会生活心理を反映していること、またその使  
用状況や語構造の上に地域差も認められることについては、すでに報告してきた<sup>(1)</sup>。今回は、  
山口県下関市安岡地区の、農業集落の門名と漁業集落の屋号とを比較考察する。

響灘に面している安岡地区は、もと豊浦郡安岡町で、昭和12年、下関市に編入された。  
この安岡町は、漁業・商業の安岡村、農村の福江村・横野村・蒲生野村・富任村の合併し  
て成った町であった。

この地区では農村を「イナカ」(田舎)と呼び、漁村を「ウラ」(浦)と呼ぶ。以下に  
とりあげるのは、イナカである旧福江村大字林(現、福江町、林)の門名と、オーラ(大  
浦)(現、安岡東町・安岡本町)・ワキノウラ(脇ノ浦)(現、西安岡)の屋号である。

(1) 「屋号語彙研究ノート」(『日本文学研究』第十八号)

### 一、福江町林の門名

福江町林(フクエチヨ一 ハヤシ)の戸数は127戸、このうち、本戸(ホンゴ)は77戸、  
寄留者(キリユーシャ)は50戸である。本戸は戦前からの家々で、江戸時代以前に転入し  
た2、3戸以外は土着の家である。寄留者と呼ばれる家々の多くは戦後に転入した家々  
であるが、本戸から近年分家して、まだ本戸に加入していない家も2、3戸あるという。

本戸は神社の費用の負担、部落内の共同作業に出ること、部落の諸会合への出席などの  
諸義務を持つとともに、部落の共有財産の所有者でもある。寄留者にはこれらの義務も権  
利もない。本戸の大部分は専業または兼業の農家で、非農家は数戸にすぎない。2家は商  
家である。一方、寄留の家々の多くは俸給生活者で、数戸が兼業農家である。

林集落の門名の第一の特徴は、本家分家関係が、命名の重要視点となっている点である。  
そのことを配慮して、以下には、まず一族ごとにまとめて門名をあげ、つぎに命名視点に

よる分類を行なう。一族の門名を記す時は、初めに本家の門名をあげ、それより位置を下げて分家の門名を記す。分家から出た分家はさらに位置を下げて記す。門名の右の（ ）内には想定される漢字を記し、< >内には姓を記す。〔絶〕は絶家、〔移〕は他地に移った家である。なお、後に分類して記すさいの便宜のために、すべての門名に通し番号を付した。

(2) 戸主が他地出身である本戸が一家ある。妻は本戸出身で、妻の父の懇望により、本戸加入が認められた。

## I 門名一覽

「フリヤ」門名を持つ一族、「ホンケ」門名を持つ一族、それらを持たない一族の順にあげる。

- 1 チカノフリヤ (中の古屋) <中西> 中西は地名であり、かつ、姓である。
- 2 ニヤノヤシキ (新屋の屋敷) 〔絶〕現在は本家所有の畑の名である。門名は「ニヤ」であったか。
- 3 シンヤ (新屋) <中西>
- 4 ウエノヤシキ (上の屋敷) 〔絶〕天保年間の火事で焼けた。門名は「ウエ」であったか。「シンヤ」の上の位置に家があった。現在は畑の名である。
- 5 ヒタノヤシキ (下の屋敷) 〔絶〕「シンヤ」の下に家があった。現在は畑の名。
- 6 チカ (中) <上田> 「フリヤ」と「シンヤ」の間に家があった。現在の家は別の場所に移ったが門名は変らない。
- 7 セ下 (背戸) <中西> 「フリヤ」の裏手に分家した家。
- 8 ヒガシネー (東の家) 「フリヤ」の東に分家した家。
- 9 オーエノマエ (大江の前) <中西> 「オーエノホンケ」の前に家を建てた。現在は「オーエノホンケ」跡に新築して移ったが、門名は旧のままである。
- 10 ハマ (浜) <中西> 浜に出て飲食店をしていたのでこう呼ばれる。現在は林に帰っているが、門名は旧のままである。この家には、別に「11 ハマキュー」(浜久)の名もある。これは妻の名のハマと夫の名のキュー(九四郎)を合わせた門名と言う。漁家の命名法の影響を受けたものか。ただし、夫婦名を合わせたばあい、妻の名は接頭辞「オ」を持っているのが一般である。「ハマキュー」のハマは場所を冠したものかもしれない。
- 12 ツボネ (?) <津守> 門名の由来は不明。九州では隠居所を「ツボネ」と言う

所が多い。

- 13 ヤケタ(焼けた)〈植村〉 分家して間もないころ、近くの「ウエノヤシキ」が焼けた。分家当座はおそらく戸主の名を家の名として呼んでいたのであろうが、この火災以来、集落の人々はこう呼ぶようになったと、当主は言う。筆者は「焼田」、すなわち日焼田という土地状況を想定したが、当主は強くこれを否定する。小学生のころは、「オマエカタ イツ ヤケタ ホカ。」(お前の家はいつ焼けたのか)とからかわれたものだと言った。
- 14 ニシフエ(西の家)〈大西〉 「フリヤ」の西がわに家を建てて分家した家。
- 15 ババノフリヤ(馬場の古屋)〈古木〉〔絶〕 馬場は地名である。
- 16 ババノホンケ(馬場の本家)〈徳本〉 「フリヤ」の分家であるが、以下に記す「ヒタジノイエ」「ヒタノトクモト」の本家で、両家が「ホンケ」と呼ぶところから、自然にこの名となった。
- 17 ヒタジノイエ(下地の家)〈下田〉 本家の真下、かつ前に分家した。一般には本家の前に分家することは避けるが、親や兄は本家の前に分家することがある。ここは兄が分家した家である。
- 18 ヒタノトクモト(下の徳本)〈徳本〉 戦後、林集落の下方の道路沿いに分家した。「クダリミチ」(下り道)と呼ばれた家(「ニシノフリヤ」の分家)の家に、カイズワリ(その家を購入して移転すること)で入ったが、門名は改まった。
- 19 サキババ(先馬場)〈林〉 馬場のはずれの位置に分家した家。
- 20 トナリ(隣)〈村中〉 本家である「サキババ」の隣に分家した家。
- 21 オチャヤ(お茶屋)〈林〉 「オチャヤ」は、藩主のお茶屋(休憩所)があったことによる地名。昭和期に入って、その地に分家した家である。
- 22 ミヤノババ(宮の馬場)〈松本〉 馬場一族の中では、もっとも福江八幡宮に近い家である。
- 23 ババノシンヤ(馬場の新屋)〈宮原〉
- 24 ウシロヤシキ(後屋敷)〈宮原〉 「シンヤ」の宅地を分けたか。その後ろに分家した家。
- 25 マエノフリヤ(前の古屋)〈前田〉 林集落の前方(マエホー)にある家。
- 26 マエノシンタク(前の新宅)〈前田〉 「マエ」は「マエノフリヤ」を意味するの

であろう。

- 27 ヘヤ (部屋) <川畑>
- 28 コマイ イエ (小家) <前田> 「ヘヤ」と並んでいる小さな家。「シntax」から子供を使いに出す時、「コマイ イエノ オバサンカタ」のように言っていたのを、近隣の人々もまね、いつかそれが家の通称となったものという。
- 29 マエヤシキ (前屋敷) <前田> 「フリヤ」の斜め前に分家した家。「マエヤシキ」という名は、「マエノフリヤ」の屋敷内に建てたことを意味する名か。
- 30 ニシノフリヤ (西の古屋) <石田> 林集落の西方 (ニシガタ) にある家。
- 31 ニシノシntax (西の新宅) <石田> 前接部の「ニシ」は「ニシノフリヤ」を意味するのであろう。
- 32 ヒタ (下) <大下> 「フリヤ」の西がわの家。土地が低いわけではない。
- 33 ヘヤノマエ (部屋の前) <林> 分家ができた後の命名であろう。それ以前は、「ヘヤ」、あるいは「ニシノヘヤ」と呼ばれていたか。
- 34 ヘヤノセド (部屋の背戸) <林> 本家が前、分家が背戸の位置になるように家を建てるので、門名も「マエ」「セド」と対応する。
- 35 シトクノフリヤ (地徳の古屋) <地徳> 36 「シトクノホンケ」と呼ぶ人もある。「シトク」は、地徳院のあったことに基づく地名。
- 37 シトク (地徳) <福本>
- 38 シトクノシntax (地徳の新宅) <福本> 39 「トリーモン」 (通り門) とも言う。「ナガヤ」 (納屋) の中央に、本家への通路を作った。その建築様式が珍しかったので、人々はそれに注目して門名として呼んだ。
- 40 コーヤ (紺屋) <徳永> 紺屋を営んでいた。「コーヤジトク」 (紺屋地徳) とも。
- 41 マエジトク (前地徳) <徳永> 「コーヤ」の家督を息子に譲った夫婦が娘を連れて分家、養子をとった。「コーヤジトク」の前に分家したのでこう呼ぶ。
- 42 サコノホンケ (迫の本家) <内田> 「サコ」は地名である。
- 43 サコノシntax (迫の新宅) <野上>
- 44 ハナ (鼻・端) <野上> 迫の端の方に居を定めた家。
- サコノヒデ (迫の秀) <野上> 明治の末ごろの分家。当主は秀雄。先代の名は長四郎で、その当時は「サコチャー」 (迫長) と呼んだ。このように、代替わりとともにかわる家名は門名とは言えない。「カドナワ ナイコー …。」 (門

名はないまま…。)と土地人は言う。

- 45 ハチカン (はちかん) <上田> 「ハチカン」は「小田」(コダ) 部落内の地名。ここに分家したが、林の組内に入っている。小田には、同じ門名の旧家が別にある。
- 46 ハマノウチダ (浜の内田) 日露戦争ごろ、浜に分家した家。 47 「ハマノタバコヤ」とも言う。
- テッチャンカタ (哲ちゃん方) <内田> 昭和40年ごろの分家。当主の名を家の名として呼ぶ。門名ではない。
- 48 コニシノホンケ (小西の老家) <小西>
- 49 ニーナエ (新<sup>にい</sup>な家?) <小西> 「ニーナ」は「新しい」の意の形容動詞である。「ニーナヤ」と言う人もある。
- 50 コーバイ (購買) <西> 戦争直前、購買組合が農協に吸収された時、その建物を払い下げてもらい、住宅とした家。
- 51 ニシノヘヤ (西の部屋) <大西> 本家の屋敷を二分し、本家の西がわに分家した。
- 52 ヤブノウチ (藪の内) <小西> 家の傍らに藪があった。本家から孫を使いに出す時、「ヤブノウチノ オバサンカタエ …」と言っていた。近隣の者たちがこれを耳にし、「ヤブノウチ テヤ。」(藪の内だって。)と言っているうちに、いつか門名として定着した。
- 53 ニシノホンケ (西の老家) <西村> 30 「ニシノフリヤ」とは関係のない家である。ともに「西方」(ニシガタ) に家がある。
- 54 ニシノインキヨ (西の隠居) <西村> [絶]
- 55 インキヨノヘヤ (隠居の部屋) <村上> [絶] 家の前に溝があったので、56 「トビワタリ」(飛び渡り)とも言った。
- (門名不明) <西> [絶]
- キッチャン (吉ちゃん) <西> 当主の名を呼んだもので、門名ではない。以前は姓と先代の名とを合わせて「ニシキュー」(西久)と呼んでいた。戦後の分家である。
- 57 マツバノホンケ (松葉の老家) <松中> 「松葉」は地名である。
- 58 マツバノヘヤ (松葉の部屋) <松村> 婿養子をした後に息子が生まれたので、その息子連れて親が分家した家。

- 59 マツバ (松葉) <松村> 「ヘヤ」の分家であるが、以前に絶家となっていた家の屋敷を明治末年につき、門名もついだ。
- ユタカカタ (豊方) <松中> 「ユタカ」は当主の名で、門名ではない。昭和38、9年ごろの分家である。
- 60 ウチモトノホンケ (内元の本家) <内元>
- 61 ウチモトノヘヤ (内元の部屋) <内永>
- 62 ヒタノセド (下の背戸) <林> 最初の家は本家の真下、かつ後ろがわにあつた。一時、離村。帰村して「マエヤシキ」の家に居住しているが、門名は旧のまま。
- 63 ヤスナガノホンケ (安永の本家) <安永>
- 64 ヤスナガノシンタク (安永の新宅) <安永> 明治末年の分家である。
- 65 オーエノホンケ (大江の本家) <大元> 「大江」は地名である。
- 66 オーエノシンタク (大江の新宅) <吉村>
- 67 ヒガシノマエ (東の前) <上元<sup>かみ</sup>> 「東方」(ヒガシホー)にあつた家。「マエ」は分家から見た本家の位置である。
- 68 ヒガシノシンタク (東の新宅) <上岡<sup>かみ</sup>> 他の一族では「マエ」「セド」と対応しているが、この本家・分家は「マエ」「シンタク」で対応している。
- 69 マエヤネゾエ (前屋根添) <林> 「屋根添」は地名。「マエ」は分家から見た位置。
- 70 セドヤネゾエ (背戸屋根添) <林> 本家の背戸の位置にある分家。
- 71 マエコヤシキ (前小屋敷) <市村> すでに絶家となっている「西川」姓の財産家が、この家の本家かもしれないという。
- 72 セドコヤシキ (背戸小屋敷) <市村>
- 73 ショーユヤ (醤油屋) <市村> 戦時中の企業整備で廃業したが、門名は旧のままである。
- 74 オータノマエ (大田の前) <大田> [移] 屋敷は残している。
- 75 オータノセド (大田の背戸) <大田>
- 76 ウエノマエ (植の前) <植田> 先祖は公家で、戦国時代に来たかと言われている。
- 77 「アカワン」(赤腕)とも言う。この名は、下級貴族は朱塗りの腕で食事をしたという説にもとづくもので、陰口だという。
- 78 ウエノセド (植の背戸) <植田>
- 79 ニシテノマエ (西手の前) <西田> 家は「前方」(マエホー)にある。「ニシテ」

の基準は不明であるが、姓の「西田」とかかわるものか。

80. セドニシテ(背戸西手) <西田> 他の一族のばあい、「前～」と「背戸～」または「～の前」と「～の背戸」のように対応しているが、79と80は、「～の前」「背戸～」とあって、整っていない。
81. ダイク(大工) <西田> 昭和40年代の分家である。この家が大工でなくなった時、この名が続くかどうか今はわからないが、ひとまず門名としてとりあげる。
82. ミスマ(三隅) <三角> [移] 明治年代に離村。住居のあった土地の状況を言う門名であろう。
83. ミスマ(三隅) <後川> 本家が離村しているので、同じ門名でも紛れない。
84. ウエミチ(上道) <上村> 家の上方に道があったことによる門名である。本家から離れた場所に居を定めた。
85. アブラヤ(油屋) <福永> [移] 郷土であった。
86. キタ(来た?) <北村> [絶] 先祖は公家だと伝えられている。「来た家」と呼んだのが門名となったかと土地人は言う。家は「西方」(ニシカタ)にあって、門名は「北」とは考えにくいという。
87. キタノダイク(来たの大工?) <北村> 昭和38、9年ごろの分家。大工である。この家の前に大きな水溜があったので、本家から孫を使いに出す時、「タンクノオバサンカタ」のように言っていた。近隣の者もそれをまねているうちに、88「タンク」も門名となった。
89. イバ(射場) <福崎> 「射場」は地名。福江八幡宮の射場であったという。江戸初期に転入した家である。
90. ツギバ(継場) <馬場> [移] 荷物・文書などの輸送の中継所。明治5年に郵便法が制定されるまで、諸地に「継場」を置いて、荷物や文書を送っていた。福江ではこの家が「継場」で、名家であった。
- サコタ <迫田> (迫田) [移]
- サコタ <迫田> (迫田) 士族であるから、本家・分家ともに「サコタサン」と姓で呼ぶ。

植村清治氏にご教示いただいた、林集落の家々の門名は以上である。次項では、これらの門名の命名視点による分類を試みる。

## Ⅱ 命名視点による、門名の分類

林の門名の中には、二つの命名視点を持つものがある。たとえば、「チカノフリヤ」は、その家が「中西」という場所にあることと、一族内のもっとも古い家であることに注目しての名である。これらについては、より重要と思える命名視点によって分類している。なお、以下の門名に冠した番号は、門名一覧との対照の便宜のために、一覧中の番号を写したものである。頁数の関係上、片仮名表記だけで列挙していく。

### A 本家分家を言う門名 32

1, 15, 25, 30, 35フリヤ 16, 36, 42, 48, 53, 57, 60, 63, 65ホンケ 26, 31, 38, 43, 64, 66, 68シンタク 3, 23シンヤ 49ニーナエ 27, 51, 55, 58, 61ヘヤ 54インキョ 12ツボネ 2 ニーヤノヤシキ

2は、先に述べたように、現在は畑名である。家があった時には「ニーヤ」であったかと推定してここに置く。

### B 居住場所を言う門名

#### a. 本家を基準とした位置を言う門名

20トナリ 7セド 32ヒタ 6チカ 62ヒタノセド 8ヒガシネー 14ニシノエ 17ヒタジノイエ 29マエヤシキ 24ウシロヤシキ 4ウエノヤシキ 5ヒタノヤシキ 41マエジトク (6は、「フリヤ」と「シンヤ」の中間にあることを言った名であるから、厳密には、別に分類項目をたてるべきであろう。)

#### b. 「前」「背戸」と対応する本家分家門名

69マエヤネゾエ 70セドヤネゾエ 71マエコヤシキ 72セドコヤシキ 79ニシテノマエ 80セドニシテ 74オータノマエ 75オータノセド 76ウエノマエ 78ウエノセド 33ヘヤノマエ 34ヘヤノセド

「前」「背戸」を上部要素に持つ門名の本家分家と、後部要素に持つ門名の本家分家との間に、立地状況の差などは認められない。

#### c. 住居のある場所の名、状況、由来、位置などを言う門名

10ハマ 59マツバ 45ハチカン 89イバ 22ミキノババ 19サキババ 37ジトク 21オチヤヤ 44ハナ 82, 83ミスマ 67ヒガシノマエ 9オーエノマエ 84ウエミチ 52ヤブノウチ 56トピワタリ 13ヤケタ 18ヒタノトクモト 46ハマノウチダ

### C. 家屋の状況・由来などを言う門名

39トリーモン 28コマイ イエ 88タンク 50コーバイ



#### D. 生業を言う門名

90ツギバ 40コーヤ 85アブラヤ 73ショーユヤ 81ダイク 87キタノダイク 47ハマノ  
タバコヤ

#### E. あだな門名

77アカワン

#### F. 夫婦名を組み合わせた門名

11ハマキュー

#### G. 不明

86キタ

#### H. その他

姓を言うもの2家 戸主の名を言うもの4家

### Ⅲ 門名の考察

#### 1. 本家分家を言う門名について

「フリヤ」と「ホンケ」とは、ともに本家の門名である。したがって一族の中に、両門名の存することはないはずである。ところが、「ババノフリヤ」の分家に「ババノホンケ」がある。これは、その分家から出た「ヒタジノイエ」「ヒタノクモト」が、その家を「ホンケ」と呼び、それが集落内の一般呼称となったためである。門名一般に、このたぐいの命名——特定用法の一般化——はありそうに思える。

「フリヤ」を本家とする一族と、「ホンケ」を本家とする一族とは、概して前者に分家が多い。あるいは「フリヤ」のほうが「ホンケ」より古いころの門名かもしれない。

「フリヤ」「ホンケ」の門名を持たない一族は、一般に、その相対的位置を言う「前」「背戸」を、その門名の語要素として有している。かつ、一族は両家のみである。ところで、「ヘヤノマエ」は「ニシノフリヤ」の分家である。「マエ～」「～ノマエ」門名は、「フリヤ」「ホンケ」よりは新しい門名、新しい家かもしれない。

分家門名の「ツボネ」を山口県下で筆者が聞き得ているのは、ここにあげたものと、同じく安岡地区の新町の「ツボネ」家だけである。両家は親戚ではない。隠居所を「ツボネ」と言う所は九州に多い。この門名は、安岡地区と九州との関係の深さを見せている一例であろうか。

#### 2. 位置・地名を言う門名について

分家門名の「トナリ」「ヒタ」など、位置を言うものは、本家を基準とした位置である。

一方、本家門名の「ナカノフリヤ」の「ナカ」、「ニシノホンケ」の「ニシ」は、それぞれ地名「中西」「西方」の略で、位置を言うものではない。

分家門名で場所名を言ったもの、すなわち「ハマ」「ハチカン」「オチャヤ」は、いずれも本家との位置関係の言いにくい、離れた場所に分家した家々の門名である。

## 二、大浦の屋号と脇ノ浦の屋号

かつて大浦（オーラ）と呼ばれていた浦は、現在は安岡本町と安岡東町で、戸数は約280戸である。一方、脇ノ浦（ワキノウラ）は今の西安岡、戸数約140戸である。西安岡の浜口二郎氏のご調査によれば、この戸数は明治19年ごろと大差がないということである。つまりこの浦集落内の家々の移動は少ない。ただし明治末年までは、両浦の家々の多くは漁家であり、回漕業の家もあったが、現在の漁家は大浦が約80戸、脇ノ浦が約30戸である。その他の家々の多くは会社工場勤務であり、回漕業の家々はない。

藩政期以来、漁村として、また北浦一帯の魚市場として栄えたこの浦に衰退状況をもたらしたのは、鉄道の開通である。大正2年、下関から豊浦郡の小串に鉄道が通じ、さらにそれが延びると、これまで安岡の市場に集まっていた北浦の魚は、鉄道で下関の市場に直送されるようになった。一方、地元の漁師も老岐・対馬にまで出漁することは次第になくなった。またここはカネリ（頭上運搬の、女性の魚売り）の浦としても有名であったが、昭和13、4年ごろ以降はその姿も見られなくなった。

浦では、伝統的家称語を「ヤゴー」（屋号）と言う。以下には、聞き得た屋号を命名視点によって分類したものをあげる。先の林集落の門名とは違って、本家分家関係を屋号の上に言うことはきわめて稀である。したがって、一族ごとに屋号をまとめて掲げることは不必要であり、また不可能であった。

(3)響灘沿岸の漁村の総称である。

### I 命名視点による屋号の分類

#### A. 本家分家を言う屋号

**大浦** ホンヤ（本屋）「アマヤ」「クニゲン」とも言う。インキョ（隠居）「ホンヤ」の分家である。**脇ノ浦** フルヤ（古屋）「サキヨシ」という船名屋号のほうがよく親しまれていて、「フルヤ」は知らない人が多い。

#### B. 居住場所の位置・状況を言う屋号

**大浦** ナカヤ（中屋）農村である梶栗<sup>かじくり</sup>から大浦に出た家。酒屋である。この屋号は

梶栗から持ちこんだか、大浦に移った後の命名であるか、明らかでない。脇ノ浦 カミ(上)家がやや高い位置にあった。魚問屋、回船問屋。別屋号の「マシヤ」のほうが人々によく知られている。ニシノヤ(西の屋)ふのり問屋。現在は「ニシ」と呼ぶ。スミヤ(隅屋)先代まではナワフネ<sup>ハモナフ</sup>(縄船一延縄漁をする船)の船頭をしていた家。

### C 家屋の状況を言う屋号

大浦 ナヤ(納屋)帆や櫓を納める、浜の小屋に住んでいた家。脇ノ浦 イヅラ(居倉?)瓦ぶきの家。

### D 生業に関する屋号

#### a. 生業名屋号

大浦 トーカイヤ(渡海屋)回漕業。幕末の頼母子講帳には「東海屋」と記してある。アミヤ(網屋)網元の家。「ホンヤ」「クニゲン」とも。イシヤ(石屋)イカケヤ(鈎掛け屋)ヒタテヤ(仕立て屋)カシヤ(菓子屋)以前は駄菓子屋、現在は呉服商。

脇ノ浦 コメヤ(米屋)サラヤ(皿屋)陶器類を商っていたか。安岡には、九州から茶碗船が入っていた。ウオヤ(魚屋)先祖は問屋の支配人格で、彦岐・対馬に魚の買付けに行っていた家。エンシヨウヤ(煙硝屋)隣接集落の横野の硝石土を採取していた家。フロヤ(風呂屋)「セキヤ」という別屋号もあるが、「フロヤ」の方がよく知られていた。

#### b. 船名屋号

脇ノ浦 エベスマル(蛭子丸?恵比須丸?) テンシヤマル(天赦丸) サキヨシ(崎吉)「崎」は、古崎(フルサキ)姓の一字を取ったものか。「フルヤ」とも言う。イクヨシ(幾吉)「オケヘー」(桶平)とも言う。

これらはいずれもイサバ(運送船)の名である。すなわち、船名屋号は回漕業の家々の屋号である。対馬沖でブリ漁がさかんであったころ、イサバがこれを関西方面に運び、大阪、高砂、尾道で船積みをした荷を安岡に持ち帰った。

#### c. 店名屋号 嘉字嘉名屋号である。

大浦 マツヤ(松屋)酒屋である。エビヤ(海老屋)米酢を製造し、北陸、大阪方面に広く販売していた店。ヨシヤ(吉屋)現在の人々の知るかぎりでは漁家であった。姓が「吉岡」なので、その一字をとってこう呼んだのであろうという。ただし、幕末の頼母子講帳にこの屋号は見えていない。以前は商業ではなかったか。ヨシノヤ(吉野屋)油

やランプなどを商っていた家。 脇ノ浦 マスヤ (栢屋) 魚問屋, 回船問屋

### E 出身地を言う屋号

大浦 コクラヤ (小倉屋) 幕末の小倉戦争後豊津から転入した家。 ワカマツヤ (若松屋) 北九州の若松 (現, 北九州市若松区) から転入。初めは油の行商, のちに酒屋。明治18年ごろの頼母子講帳にこの名が見える。 ヤタマヤ (矢玉屋) 豊北町矢玉より転入。回漕業。 ヤマグチヤ (山口屋) 山口より転入。棟梁, のちに鍛冶屋。 マエシヨージ (前小路) 隣接集落の横野の前小路より転入したが, もとは伊予出身。呉服屋。 脇ノ浦 ウダヤ (宇田屋) 阿武郡の宇田郷より転入。天保7年の頼母子講帳にすでにこの名が見える。 ブンゴヤ (豊後屋) 繩船船頭の家。嘉永2年の頼母子講帳にこの名もある。 チョーフヤ (長府屋) 大工の家。 ハマノチョーフヤ (浜の長府屋) 長府屋の分家。漁家。セキヤ (関屋) 下関からの転入か。嘉永元年の頼母子講帳にこの名もある。

### F 人名を言う屋号

#### a. 個人名を言う屋号

大浦 イエモンサン (伊右衛門さん) 中野伊右衛門の家。格式のある家だったという。接尾辞「サン」を添えて呼んだのはこの家だけである。

#### b. 人名に居住場所を冠した屋号

大浦 カワカツ (川勝) 川辺にある勝五郎の家。「川勝かまぼこ店」の看板を, 高年者は記憶している。幕末の頼母子講帳にこの名もある。 カワナミ (川浪) 川辺のかまぼこ店。浪~の名の人が居たのであろう。

#### c. 人名に「生業」を冠した屋号

大浦 アミヘー (網平) 網元の「~平」の一家。 アミマゴ (網孫) 網元の孫次郎の家。先々代が初代。 アミシン (網新) 吉岡新蔵の家。 アミカツ (網勝) 安本勝五郎の家。

「アミ」(網) は網元を表わしている。

脇ノ浦 カジマン (鍛冶万) 鍛冶屋の万次郎の家。

#### d. 人名に特技を冠した屋号

大浦 アジトラ (鯨虎) 鯨の一本釣りの名人, 虎吉の家。 カジカメ (梶亀) 梶取りの名手, 亀吉の家。

#### e. 村相撲のしこ名を言う屋号

大浦 ニシノウミ (西の海)

f. 姓+名の簡略屋号

**大 浦** オケナミ<桶尾浪蔵> クニゲン<国弘源吉>別に、「ホンヤ」「アマヤ」の屋号もあるが、魚問屋の時代は「クニゲン」と呼ぶことが多かった。ハマゲン<浜福源次郎>魚、その他の物を商ったよろず屋。ヤマキン<山本金蔵>置き屋。**脇ノ浦** オケヘー<桶尾平三郎>人々は別屋号の「イクヨシ」を言うことが多かった。ヤマギ<山本儀>三代前に長府から転入した家。転入後に、「儀～」の名の人はいない。長府時代の屋号がそのまま使われたのかもしれないという。

ところで、「オケナミ」「オケヘー」は、「姓+名」と見えるが、じつは「桶屋の～」で、「生業名を冠した人名屋号」かもしれない。桶屋を営んでいたことが明らかでないので、ひとまずここに置いた。幕末の頼母子講帳に見える「網伝」「桶仁」は、「生業名を冠した人名屋号」であろう。筆者の見た、天保以降、明治19年までの頼母子講帳では、この語形式の屋号はまれであった。幕末ごろから、ようやく流行し始めた屋号形式であったか。なお、今日、魚市場での呼び名は「姓+名」の簡略呼称であるが、戸主の代替わりとともにその呼び名も変わる。したがって屋号ではないと、土地の人は言う。

g. 夫婦、父子の名を組み合わせた屋号

**大 浦** オタゼン (おたと善太郎) オヤゲン (お八重と源〜) オテイシゲ (おていとシゲ) デンゴローオワサ (伝五郎とおわさ) サントメ (三吉ととめ) ショーサンユリ (正三?と百合松)

以上のうち、「ショーサンユリ」だけが父と子の名の組合せ屋号で、他はすべて夫婦の名を合わせたものである。夫婦名を合わせた屋号、あるいは女性名屋号は、萩市の見島・相島・大島、長門市青海島の通(カヨイ)集落にある。すなわち、山口県の日本海がわ北部島嶼に見られたのであるが、南部沿岸の安岡にも、夫婦名屋号が、上記のようにいくらか見られた。

G その他

**大 浦** ムラヤ (村屋) 庄屋であったという。家の格式を言う屋号であろうか。ムジンゴ (無尽講) 無尽講の胴元をしていた家の呼び名で、屋号ではないという。

**脇ノ浦** ムラヤ (村屋) 大浦の「ムラヤ」とは異姓であるが、同じ寺の檀家である。あるいは親戚かもしれないという。こちらは庄屋格ではない。

II 両浦の屋号の比較

両浦の屋号語彙には、ともに、本家分家を言う屋号、居住場所・居住家屋を言う屋号は

少なく、生業屋号・出身地屋号が多い。ただし、両浦の生業屋号の内容にはかなり差異があつて、たとえば船名屋号は脇ノ浦にしかない。回漕業の家々はほとんど脇ノ浦にあつたから。

一方、人名屋号が栄えているのは大浦である。漁業集落でありながら、脇ノ浦には人名屋号は稀である。漁師の家を言う時は、「カメオシカタ」・「ゲンカタ」のように、戸主の名に「方」を添えて呼んだ。しかしその呼び名は戸主の代替わりにつれて変るもので、屋号ではないと、土地人は言う。漁業状況などの差異を、なおよく調査してみなければならぬ。

### 三、林の門名と両浦の屋号

| 門名・屋号の種類      | 門名・屋号の実数と比率 |            |
|---------------|-------------|------------|
|               | 林           | 浦          |
| 本家分家を言うもの     | 32<br>33.7% | 3<br>4.8%  |
| 居住場所を言うもの     | 44<br>50.6  | 4<br>6.3   |
| 家屋の状況・由来を言うもの | 4<br>4.4    | 2<br>3.2   |
| 生業に関するもの      | 7<br>7.8    | 19<br>30.2 |
| あだ名的なもの       | 1<br>1.1    |            |
| 出身地を言うもの      | 0<br>0      | 10<br>15.9 |
| 人名を主要素とするもの   | 1<br>1.1    | 22<br>35.0 |
| その他・不明        | 1<br>1.1    | 3<br>6.3   |

両地の門名・屋号を、別表のように整理してみると、その語彙構造の異なる様子が明らかである。

林の門名のばあいには、本家分家門名と居住場所門名との合計が全門名の84%を超える。そして居住場所門名の多くは本家を基準とした位置を言うものである。家と家との関係が日常生活に大きく

かかわり、人々の関心も深かつたのであろう。一方、浦の屋号では、人名屋号と生業屋号とがもっとも多く、出身地屋号がこれにつぐ。浦社会の生活状況と家認識がここに見られる。

ところで、浦にも「フルヤ」「ホンヤ」などの農村型屋号が皆無ではない。しかしそれらよりは、その家々に新しく命名された「サキヨシ」（船名屋号）や「クニゲン」（姓＋名）の農村型屋号が優勢になっている。逆に、林の門名にも、「ニシキュー」（姓＋名）や「ハマキュー」（夫婦名）のような農村型門名がわずかながら見えている。

さて、門名と屋号の使用状況はおおいに異なっている。林では、門名はまさにカド（家）ごとの名で、今日の日常生活の中に生きている。一方、浦では、限られた屋号が、60歳以

上の人々の口にのぼる程度にすぎない。

### おわりに

集落の生業状況が、家称語彙の語彙構造に大きく影響することは、すでに杉村孝夫氏が論じておられ、私も述べている。今回は、その一具体例として、下関市安岡地区の農業社会の門名と漁業社会の屋号とをとりあげた。

もっとも、家称語彙の語彙構造にかかわるのは生業ばかりではない。たとえば下関市に隣接する豊浦郡の、豊北町角島(ツノシマ)元山(モトヤマ)部落は散村農業社会で、この地の門名には、地名・地形を言うものが多い。集村の林で、本家を基準とした位置を言うのとは、居住場所の言いかたが異なっている。また、萩市相島は集村農業社会であるが、この地の82門名(総戸数85)中の59門名は、「チューベヤ」(忠兵衛屋)のような、素朴な個人名門名である。漁業社会間にも、微妙な差が見られることは、大浦と脇ノ浦の屋号の上にも明らかであった。

語彙研究の一分野である命名、わけても「家」への命名に私の関心は深い。姓を名乗る以前に、いや以後にも、家々は集落内での伝統的な家称語を持っていた。その語彙構造、またその使用の盛衰に、社会差があり地域差があることは、おおよそわかってきた。それを明らかにしていくことが、日本語研究にどのような意味を持つかをみずから問いつつ、調査を深めていきたいと願っている。(1984. 9.20)

林の門名は植村清治氏(明治40年生)に、両浦の屋号は三浦善介氏(明治42年生)と浜口二郎氏(明治44年生)にご教示いただいた。厚く御礼申し上げます。